

<書評>D.F. フレミング 『現代国際政治史』

オバタ, ミサオ / OBATA, Misao / 小幡, 操

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

12

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

138

(発行年 / Year)

1966-02-28

書評

D. F. Fleming

The Cold War and its Origins 1917—1960

George Allen and Unwin Ltd. London

小幡操

翻訳者が原書の批評をして悪いという理由は少しもない。しかし翻訳者の願いは、もつばら原著の内容を日本の読者に知らせたいということにある。だからこの場合も、主として内容の紹介で終るかもしれない。ことに、制限された紙面の問題もある。こうして、批評のとぼしい書評という妙なものになる可能性がかなり多い。読者のゆるしを乞わねばならない。

1

国際関係から現代をみると、冷たい戦いを除いて、これを正しく理解することはできない。冷たい戦いは現代に深く根をおろした悪である。この事実は、

書評

冷たい戦いという表現に反撥を感じる人々の主観とは別個に存在する。だから、現代の危機的側面を理解するためには、冷たい戦いの起原と現状と発展とをしっかりとらえねばならない。これを試みたのが、本書である。

「現代」をいつのころときめるかについては、異論がある。しかし本書でも、ほと一般の慣習にならって、第二次世界大戦以後としている。ただし著者は、冷たい戦いの起原を探るために、第一次大戦まで、さらにロシアにおける「十月革命」さらには「二月革命」前にまでさかのぼる。

つぎに、「冷たい戦い」の定義については、著書は必ずしも明確な概念規定をしていない。著者にとつては、いかにして冷たい戦いを終らせるかという、もつと緊急な課題があり、具体的にこれと取組むことが最大の関心であったのだあろう。

ただ、読者としては、「冷たい戦い」ということばにはまつたく違った二つの用法があるため、そのいずれの意味で著書が使っているかという疑問もあろうし、それだけに答えておかねばならない。

「冷たい戦い」という表現をだれが最初に使ったか

という詮索は、いまはしない。しかし一般には、一九四七年、アメリカの評論家ウォルター・リップマンがこのことばを一躍有名にして以来、多くの人々は思想・経済・政治体制を異にした国家間の「武力に訴えないだけのあらゆる戦い」を意味するものと考えている。

つまり、「状態」説である。だがソ連をはじめとする社会主義諸国では、冷たい戦いを、社会主義体制を崩壊させ、または共産主義の実現をはばみ、少なくともこれを遅らせようとする資本主義諸国の政策だと考えている。事実、資本主義国家群でも、この見方を裏づけるような主張が強くおこなわれている。一九四七年三月十二日のトルーマン宣言このかた、アメリカが実施してきた「ソ連封じこめ」政策にも、核心に、これに近いねらいがあったことを、時の國務省政策企画局長ジョージ・ケナンは、同年七月号の『フォリン・アフェアズ』誌で明らかにしていた。また一九六二年十二月三日、日米貿易経済合同委員会出席の日本側六閣僚の歓迎の宴で、ケネディ大統領がおこなった「中国封じこめ」演説にも、「中国政府の政策転換」という希望的観測の形でこれに似た考えがひそんでいたのである。いいかえると、「政策」説である。

著者は、冷たい戦いを「状態」とみるか、「政策」とみるかについては、特にこれを明らかにしていない。しかし「政策を含めての状態」と考えているように思われる。

2

ともあれ、著者は本書のために十五年の労力をついやしたといっている。本書は二巻・四部に構成されている。全巻は索引まで入れると一一五八ページにのぼる。

第一巻は、序文その他のほかに、第一部「敵と味方」一九一七——一九四五年と題して、歴史上いまだかつて戦い合ったことのないアメリカとロシアを中心に、第二次大戦後なぜ冷たい戦いがするどく戦われねばならなかつたかを説く。このことは、第二次大戦の場合、「大連合国」内ではアメリカとソヴェトが最も緊密な協力関係——というより、相互依存の關係にさえあった事実を考えると、たしかに問題になる。アメリカは、とらわれることなく歴史の現実をみるとき、なにを「敵」とし、なにを「味方」とするかに、大きな混乱があったというのが、著者の題意であろう。こ

うした意味で、第一部はいわば「冷たい戦いの前史」である。

この「前史」のなかで、将来の冷たい戦いに最大の影響をあたえたものは何かについては、人によってさまざまな意見がありうる。しかし、イギリスの平和主義者フィリップ・ノエル・バーカーが特に強調していたのは、一九一七年から一九二一年にわたってロシア内部に起った内戦とこれに対する西側諸国の介入であった。著者も同じ見解をとっている。

第二部は「ヨーロッパにおける冷たい戦い」一九四五年——一九五〇年を取扱っている。この期間についても、異論をもつ人は少なくない。一般には、さきにも少しふれた一九四七年のトルーマン宣言をもって、冷たい戦いの始動とみるのが普通である。しかし著書は、むしろ一九四五年八月の広島に対する原爆投下から、アメリカの冷たい戦いがはじまったとする。無論、これには対ソ協調派のF・ローズヴェルトの死と、反共トルーマンの大統領就任という事実も大いにあずかっている。しかし原爆の成功とその独占的保有の夢、ソ連が開発するまでに核兵器の分野であくまで絶対的優位の地位を築きあげようとするアメリカのほか

ない願いが、米ソの協力を、米ソの対立に転換させた根本原因だと、著者は考えるのだ。

第三部は「東アジアにおける冷たい戦い」一九四五年——一九五五年を取上げている。ここで最大の問題が、一九四九年における中華人民共和国の成立であることはいうまでもない。著者もこのために、一九二七年から一九五〇年までの情勢を記録している。が、アジアについては、第二次大戦の終結からインドシナ戦の休戦にいたる間における東南アジアの植民地主義と共産主義、ナシヨナリズムの交錯関係を、特に一章を設けて説いている。また、一九五五年七月にジュネーヴでひらかれた戦後の第一次四大国首脳会談を、この第二部に入れているのも、著書独特の見方を示すものであるう。

第四部は「第二次冷たい戦い」——第二次大戦にもじって、著書はこれを「第二次冷戦」と称し、一九五五年の四大国首脳会談以後の情勢をえがいている。そして、この部の最後にあたって、いま一度「西側はなぜ冷めたい戦いに敗れたのか」の問題を考えて、将来の展望を語るのである。この場合、西側の中心がアメリカにある以上、アメリカが冷たい戦いに敗北したと

いう認識と、なぜ敗れたのかというきびしい反省があることはいうまでもない。

3

著者デンナ・フランク・フレミングは、一八九三年三月二十五日、パリに生れた。アメリカ、テネシー州ナッシュヴィルのヴァンダービルト大学の国際関係専攻の教授である。一九二八年以来というから、かなり長い学究生活だ。この間、一九四〇年から一九五一年まで同校の政治学部長をつとめたことがある。本書執筆中は、リサーチ・プロフェッサーの地位にあった。これに先立つ五年間モンマス大学の社会科学の教授もしていた。イースタン・イリノイ州立大学とイリノイ大学のアラムナスで、前者からは一九四九年に名誉学位をうけ、後者からは学位を三つあたえられている。フアイ・ベイタ・カッパのメンバーでもある。一九三二——三三年、一九三八——三九年の両度にわたってペシシルヴェニア大学でペイフィールド・トラヴェンリング・スカラーをしていたし、一九四六年と一九四八——四九年には、プリンストンの高等学術研究所のメンバーでもあった。ケンブリッジ大学でフルブライト

基金派遣の講師をしたこともあるし、一九五九——六〇年にはインディアン・スクール・オヴ・インタナショナル・スタディズの講師でもあった。その他いろいろあるが、こうした学歴を一つ一つ書いてみると、その煩にたえないし、読者も退屈するであろう。

それよりも、一九三九年から八年間にわたって、著者がナッシュヴィルのラジオで時事問題の解説をしたり、一九三四——三七年にはナッシュヴィル・テネシアン紙で、一九五二——六〇年にはメソヂイスト・クラスマイトで、一九五五——六〇年にはブリティッシュ・ウィークリで、それぞれ一欄をうけもって評論の筆をとっていた事実の方が、本書の理解の参考になる。しかも、著者はまた、新聞記者として、他面、歴史学者として、ジュネーヴで満洲事変とエチオピア問題による国際連盟の危機や、軍縮会議の実状をつぶさに観察したし、ニューヨークの国際連合でもイラン危機の討議をするどい観察眼でとらえていた。一九三八年のミューヘン危機や一九六〇年の四大国首脳会談のみじめな流会も、当時のニュースセンターだったロンドンでじっとこれを見つめていた。かなり幅の広い活動である。そしてこれが、本書を単なる歴史書とちがう生々

としたものとしている。

著者はまた第一次世界大戦にも参戦した。国際関係史の専攻を志したのが、二度と世界戦争を発生させてはならないという大学生時代の「初心」の発露だとすれば、これに徹した人だということが出来る。アメリカの学者のなかには、手がかかつて民衆とともに考え、少しづつでも民衆の考え方で事態を動かしてゆくというのでなく、手っとり早く政権と結びついて年来の考えを実現してみたいという学者が少なくないが、フレミングはこの点、ちがうようだ。あくまで学究的・野党的精神を失わない。ジョンソン大統領のヴェトナム政策に対する批判もきびしいし、そのプロテストも決してためらわない。

といって、フレミングはマルクス・レーニン主義者ではない。それどころか、彼は、「もしアメリカがもっぱら非軍事的な方法に頼るならば、共産主義との競争に勝てる」ということに、いささかの疑いももたないという。この点、いかにもアメリカ人らしいアメリカ人と評することができよう。だが、本書が一読の必要のあるきわめて特異なもの——きわめて重要な意味をもつことになったのは、本書において著者がとっ

た独特の、しかもまことに健全な態度であり、そしてこれをあくまで固くとつて動かなかった事実である。それは、「あらゆる段階で、ある一つの面——ことは『敵』側にどのように映っているかを示そう」としたことである。著者はこれをなんの遠慮もなく勇敢にやっていた。これは、いまのアメリカ人にいささか欠けた一面であつて、この点でも、著者は現代アメリカの反省派を代表している。

本書には、ニューヨーク版のほか、ロンドン、ミラノ、アテネの各版があり、今回日本版が出版された。その日本版への序文のなかで、著者はアメリカ人の考え方——実はアメリカ政府の政策について、きわめて重要な問題を指摘していた。

5

一九六四年秋の大統領選挙で共和党が大敗を喫したのは、最右翼の候補者ゴールドウォーターが当選して、アメリカ大統領としての巨大な権力をにぎった場合、何をしでかすかわからないという恐怖を、国民がいだいたためであつた。ところが、国民の信任をえて大勝したはずのジョンソン大統領は、翌一九六五年二

月七日になって、突如として、北ヴェトナムが南ヴェトナムの内戦に対する「侵略者」だと独断したのである。そして、崩壊の危機に瀕していたサイゴン政権を救う唯一の道は、どれほど長くかかろうと、アメリカの選ぶままに北ヴェトナムを爆撃することにあるとしたという。著者の言おうとするのは、二月七日、南ヴェトナムのアメリカ軍基地プレークへの南ヴェトナム解放民族戦線の果敢な攻撃以来、アメリカのヴェトナム政策がサイゴン政権の線にそうて事実上の「北進論」に転換した事実を指すのであろう、これは、事態を客観的に観察する人々のもつ常識的な見解であるが、その後四月二十四日、ドミニカ問題でジョンソン大統領がとった措置とあわせ考えると、世界は無論のことアメリカ国民も、はなはだ重大な情勢に直面したという。つまり、アメリカは「Pax Americana」(アメリカの平和——実はアメリカによる、アメリカのための平和)に乗りだしたのであり、その地域は、ソヴェト連邦のミサイルで保護をうけていない世界の全地域を覆うのである。こうした考え方は、明かに「世界世論に対する侮辱」である。しかし、この考え方を捨てるような場合がもしくれば、そのときはアメリカは

あらゆる兵器をもって武装した「要塞アメリカ」のなかにとじこもってしまふことになるだろう、と著者はみるのである。

こうした見方も、アメリカ内部では決して珍らしいものではない。しかしこのような見方になんらかの根拠があるとした場合、世界におけるアメリカの動きは余りにも無軌道で、またわがまま勝手にすぎ、大国としての責任を感じないものだといつてよい。

第一次大戦後、アメリカの大統領ウッドロウ・ウィルソンは集団安全保障機構としての国際連盟を提唱した。しかしアメリカ自身は国内の政争からこれに参加しなかった。一方、国際連盟は、ソヴェト連邦に対しては、参加諸国の偏見から、当初は参加をゆるさなかった。二大国の参加のない国際連盟の基盤がはなはだ弱かったのはいうまでもない。軍国主義日本、ナチス・ドイツ、ファッショ・イタリアの動きがだれの目にも明かになったのち、ソヴェト連邦の参加を求めても、ときすでに遅かった。日本、ドイツ、イタリアの相つぐ侵略行為と国際連盟脱退によって、連盟の死命は制されたのである。アメリカの連盟不参加の根本的な考え方は、孤立主義であった。

そのアメリカが、第二次大戦後は地球の半周も離れたアジア地域にまで出てきて、世界の警察官をもってみずから任じている。日米安全保障条約の場合ごときは、国際連合の役割を奪ってまで「私設保安官」となり、「極東の平和」を守るのだといっている。無論、ヴェトナムの実状は、明らかに戦争である。が、アメリカは、戦争によって平和を守るという反論理、非現実、反倫理の政策をあえて強行している。しかも、それもこれもみな「アメリカの平和」のためだというのである。そして「アメリカの平和」に失敗すれば、「アメリカの要塞」のなかにとじこもって生きてゆけばよいというのである。

著者フレミングが最も力を注いで批判しようとしているのは、こうした「なりゆきまかせ」的な政策を、アメリカがいつから、どうしてとるようになったかということである。第二次大戦後、ソヴェト連邦、中国というような大国が抬頭してきたいま、このようなアメリカの政策には測りしれない危険を含んでいるからだという。

5

それにしても、ソヴェト連邦の基本的態度とその動きはどのようなものであろうか。

冷たい戦いが、思想・経済・政治体制を異にした国家間の「武力に訴えないだけのあらゆる戦い」であるとするれば、米ソ関係が問題の中心となり、したがってアメリカとしてはソヴェト連邦の態度と動きが最大の関心となることはいうまでもない。

ソヴェト体制以前であろうと、またそれ以後であろうと、ロシアは西側にとって「神秘」だとされてきた。著者はその理由として、(1)ロシアは世界最大の大陸の中央に横たわる広大な国家である。(2)大平原に住むその住民は、外部からしばしば侵略をうけたために、外国人に対して深い猜疑の念をいだいている。(3)そしてこの人民を数世紀にわたって支配してきた専制君主は、専制君主のつねとして外国人に自国をみせながらなかった。(4)またロシア以外の国々では、ロシアの歴史を研究することがきわめて少なかった、などをあげていた。

ソヴェト・ロシアの動きを知る最も重要な第二の手がかりは、著者によると、戦争に対するぬきがたい恐れであり、深い憎しみでさえある。

帝制時代の圧制とたえざる戦争による人民の極度の貧困が他の諸原因と相まって、元来マルクス主義理論からすれば最も不毛の地であるロシアにソヴェト革命を成立させたのだとみる。というよりも、戦争そのものが「平和とパン」をスローガンとするソヴェト体制を、文盲に近い人民大衆に支持させたのであって、それはイデオロギーそのもののもつ力によるものではないとの見解をとっている。

そして、戦争に対するこの憎しみは、一九一七年から一九二一年にいたる反革命による内戦と、それを西側連合諸国が使噓し援助したことによって、二つの形をとった。一つは、戦争そのものに対する憎悪感を一層深刻なものとし、これが第二次大戦につながってゆく。

ことに、第二次大戦では、ソヴェト連邦で「約一五〇〇万の人々が殺され、その二倍ほどの人たちが家を失い、六〇〇〇万にも上る人々が、ファシストらの頭で考えられるかぎりのあらゆる人間性の墮落化、野獣化」をうけただけではなかった。ナチス・ドイツとその同盟諸国の軍隊によって八八〇〇万の人が住むソヴェト領域が占領され、十五の大都市と一七一〇の小都

市、七万の村落が完全に、あるいは部分的に破壊され、六〇〇万に上る建物が焼かれ、または破壊された。さらに、三万八五〇の工業企業、六万五〇〇キロメートルに及ぶ鉄道線路、四一〇〇の鉄道駅、それに郵便、電信、電話各局を合せ三万六〇〇〇戸、五万六〇〇〇マイルの主要道路、九万にも上る橋梁と一万の発電所が破壊された。また一一三五個所の炭砒と三千の油田が潰滅された。そのうえ一万四〇〇〇の蒸気ボイラーと一四〇〇のタービン、一万一三〇〇の発電機がドイツに持ち去られたという。

第一次大戦につづく反革命内戦と外国の介入戦による国土の荒廃化、第二次大戦における予想を絶する被害とは、三つの重大な結果をもたらした。その一つは、ソヴェト体制とすればむしろ好まなかった赤軍の巨大化と「三〇〇%の安全保障」感、そしてこれにともなうドイツからの侵略路をふせぐために、ポーランドを中心とする東ヨーロッパの安全保障圏化であった。無論、ドイツに対する警戒心は動かしえないものとなり、「一世紀間に三度ドイツの侵略をうけた」立場に立たないかぎり、ソヴェト連邦のドイツに対する政策は理解しえないし、NATO（北大西洋条約機構）の

多角的核戦力の結成によって、核兵器へのアプローチをしきりに願う西ドイツの対米依存を深めようとするアメリカに対するソヴェトの疑惑は極度に強い。これは、著者の指摘をまつまでもなかるう。

6

著者が特に強調している問題に、反革命軍への援助とソヴェト領の一時占領から、第一次大戦発生までになチス・ドイツの鋒先をソヴェトに向けていった西側、とりわけイギリス、フランスの政策がある。さらに第二次大戦がすでに進行し、ソヴェトがドイツの猛攻撃を主としてうけていた間に、イギリスは第二戦線をヨーロッパに結成してドイツを直接に、積極的にたたこうとしなかった事実もあった。そしてこれらの事実が、ソヴェトにあたえた西側に対する強い警戒心であった。しかもそれでいて、アメリカは、ソヴェトに対して極東における第二戦線——対日参戦をしきりに要望したのである。戦時中における米ソ関係は、F・ローズヴェルト大統領の慎重な政策によって、ソヴェトと他の西側諸国の関係にくらべるとはるかによかった。しかしそれでも、極東における第二戦線の要求が

ソヴェトを苦境に立たせたことはいうまでもない。

ともあれ、ソヴェトはソヴェト人の血とアメリカの多くの兵器によって、東部戦線で勝利をえただけでなく、敗退するドイツ軍を急追して、ついにベルリンで最後のとどめをさした。が、ソヴェトにとってはナチス・ドイツなど「戦争屋に対する憎しみ」は国民的な実感であり、戦争への憎しみが「戦争屋」への憎悪感となることは、きわめて自然であった。

一方西側の指導層、とりわけアメリカの指導層は、ソヴェト革命に対して本能的な恐れをいだいていた。そのうえ、アメリカが移民によってつくられた国であり、その移民の大部分が古い世界の古い階層に属していたため、そしてまたアメリカの「平均」国民所得が世界第一であることを教えられていたため、ソヴェト革命に反対する保守的ムードが支配的であった。一九三二年にアメリカが世界の大国として最も遅れてソヴェト政府を承認したのは、当時の経済界の大恐慌に際して、これによって根本的な動揺をうけないソヴェト体制に対する「再認識」と、アメリカ自身の「新規やり直し」政策の必要からであった。

が、それにしても、第二次大戦中は、ドイツ、イタ

リアという共同の敵を打倒し、さらに対日参戦を求めるといふ必死の要請もあって、アメリカ政府の最高首脳は積極的にソヴェトとの関係を改善していった。が、第二次大戦が終るとともに、対ソ関係が協力から対立へと変り、しかも急激に悪化の一路をたどった最大原因は何か。

すでにふれたように、フレミングは、この根本原因を一九四五年八月の広島原爆に求めるのである。

7

このころすでに日本の軍事力はソヴェトに講和の調停を依頼するほど崩壊していた。これを知っていたアメリカにとって、ソヴェトの対日参戦は軍事的には、不必要であった。のみならず、ソヴェトの存在がわずらわしいものとさえなった。広島、長崎への原爆投下は、極東に対するソヴェトの前進をはばむ目的をももつようになった。このときすでに対ソ協調論者だったF・ローズヴェルトは死去していた。米ソの協力が対立に逆転する条件は十分ととのっていたのである。しかも、アメリカは原子力の解放という人類史上特筆すべき結果を、人類生活の向上のためではなく、大量

殺戮兵器として最初に使用しただけではなかった。その秘密を共同の敵と戦い、最も多くの血を流した最大の連合国に教えることをためらった。その「秘密」が秘密でなくなる日が決して遠くないという科学者の忠告はすべてしりぞけられた。そして、その「時をかせぐ」ためアメリカはいわゆる原子力の国際管理案を提案し、しかも何の侵略の脅威を現実にかけていなかったにもかかわらず、核兵器の開発と貯蔵を急ピッチですすめていたのである。

一方、ソヴェトはナチス・ドイツとの苦しい戦いでようやくつくりあげた東ヨーロッパの安全保障圏も、アメリカの核兵器によって重要性の大部分を失った。そして協力が対立と変った以上、ソヴェトとしても核兵器の開発を促進せざるをえなかった。それでいてアメリカは、国内のポーランド系国民の圧力もあって、ポーランドを中心とするソヴェトの東ヨーロッパ・バルカン政策をきびしく批判することを忘れなかった。ただし、あえて武力を行使し、内戦に介入してまで左派を弾圧し、右派を温存してきたイギリスのギリシャ政策、そしてこれを踏襲したアメリカの政策に対しては、無論、米英は一言もふれなかったのである。

そして著者が、つねに強調することは、介入戦と第二次大戦を通じて、ソヴェト体制は果して何ヶ月もつかを問題にしてきた西側、とりわけアメリカが、第二次大戦が終結に近づくとともに、ソヴェトが膨脹主義をとり、はなはだしきは世界征服に乗りだそうとしているとの論を、平気で吐くようになったという現象であった。しかもそれをアメリカ人は論理のうえでも、現実的にも、なんの不思議ともしていない不思議な心理状態にあった。

ここにも、反論理的な、非現実的な考え方があつた。そしてこれが、第一次大戦後、国際連盟をつくらせておいて国内の政争からこれに参加せず、第二次大戦終結近しとみるや、国際連合内における多数派工作のため、中南米に積極的に働きかけ、他方、原子爆弾の成功とともに、これを背景にあえて「世界の保安官」としてのりだし、もしこれが失敗した場合には、「アメリカの要塞」にとじこもるといふ「空中ブランコ」的な思惟態度をとらせている、と著者はみているようだ。

8

以上が、ほぼ第二部までの論旨である。著者は、す

でにふれたように、第四部にいたって、西側、とりわけアメリカが冷い戦いに敗れたという基本認識から、その原因をレジメする。

第二部までは、あくまで米ソ関係が中心となつていゝる。しかし第三部では、戦後アジアの特殊情勢、ことに反植民地主義・反帝国主義的ナシヨシナリズムという複雑な要素がはいることすでにふれた。そのうえ著者は、アジアでは、「中国の核開発能力はやがて数年にして、アメリカが東アジアの外辺を支配しつづけるのを不可能にするであろう」と予言している。一方、著者は、アメリカとしては「ソヴェト連邦や中国のような巨大な、しかもダイナミックな国民の要望は、アメリカのいだく懸念と同じように、緊急の措置を要するものだ」とも説いている。

部分的には、私は著者とちがった見解をもつていないでもない。しかし全般的に、いまの時代に一政権の政策の線にそうてものを論ずるのを「現実的」とするのでなく、民族なり、人類なりのはるかに長い生命の立場から「新しい考え方や新しい態度、新しい政策」を打ちださないかぎり、すべての民族を含めて、人類の将来はまったく暗いという点では、私は、著者の見

方と完全に一致したい。また、膨大な権限をもつひとりよがりの政権や、これと結びつく保守的世論操作機関の隠然たる勢力に対して、つねにきびしい批判を忘れない著者の勇気も、尊いものだと考えている。

9

批評はもとより、紹介も、はなほだ系統的でなかった。しかも、それは第一部、第二部の要点だけで終わっている。もし、貴重な紙面がゆるされれば、第三部、第四部についても紹介をつづけてみたいと思う。